
鬼戦記～黒と白～

真鍋 蛭火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼戦記〜黒と白〜

【Nコード】

N0099Z

【作者名】

真鍋 螢火

【あらすじ】

黒が禁忌とされた時

一人の少女を中心に、復讐の渦が回り出す。

プロローグ（前書き）

始めました。暇潰しにお使いください。

プロローグ

世界を統べる者『十三光使』
じゅうさんこうし

彼らは黒を忌み色とし、黒を持つ者を殺した。

生まれたばかりの子でも、王の子でも・・・

黒を禁忌としたのは「力を持ちすぎ」だからだそうだ

黒は力の象徴とされる色

だが、あくまでも黒は『象徴』に過ぎない。
はつきり言って狂ってる。

だが、人はそれを受け入れた。

その人も狂ってる。

そんな時、鬼神族おにがみの王の子が黒を持って生まれた。

周りの声を恐れた王はその子を殺そうとしたが、王にそのような度胸は無かった。

その子は城に幽閉され、陽を見ることも無く鬼の歳で6の少年となった。

その時、城では世継ぎの問題が起きていた。次に生まれた子が知の象徴とされる白を持つ女であったからだ。

白は禁忌の真逆とされる聖色であったがその子は女

力の王とされる鬼神の長にはなれなかった。

そしてマズイ事に黒を持つ子である兄を見つけ、慕い始めた。

黒を持つ子を産み、心労に侵されたままの王妃は白の子を産み、死去

それによって王は愛する者を奪った黒と白を国から追放し、
12の黒の子と6の白の子の運命が別れた。

私の名はリアン。白髪赤目の人間で17の容姿の鬼神だ。復讐の為に、何人も人を殺した。罪悪感はない。

一番の目的は兄を殺した『十三光使』4か月前、その9人目を殺した。

10人目を殺すために新たな国へ足を踏み入れた。まずは商店街に入る。

猫を追う子供・買い物客・商人様々な人が居る中近寄りがたい雰囲気
を放つ私に声を掛ける男がいた。

「すみません」

「.....」

無言で横を向くと花屋があり私の目の前で跪すずく青髪青目の青年が
いた。そして手に持つ白ゆりを私に向けた。

「この花を受け取ってくれませんか？」

男が女に花を渡す行為は俗にプロポーズと言う。
期待を込めた青い眼差しを1秒ながめて、地面に転がる小さな石を
広い、男の眉間に投げた。

ビシッ！

「・・・！！・・・」

男は痛みに悶絶しながら額を押さえた。

「・・・っ・・・！！・・・」

私は心から溢れる何かを抑え、宿に向かった。

プロローグ（後書き）

未永く読んでもらえるとありがたいです。
お付き合いをよろしくお願い致します。

青き青年

僕はギルバート。青髪青目のキングエルフだ。キングといっても王位は弟に押し付けだし、大した事のない男だ。人間の容姿で20歳ぐらいだね。

あ、言い忘れたけどエルフといっても耳は尖ってないよ。魔力沢山の人間はキングエルフって覚えてくれていいよ。

そんな僕は家にも飾ろうかな〜と思って花屋に行っただよね〜そして花を選んでたら不思議な気を感じて振り向いたら彼女が居ました。

白いショートヘアに赤いキラキラとした瞳、桜をあしらった衣姿は美しく、僕ビジョンでキラキラフレームがついてました。ひとめで恋に落ちました。

僕は迷いません。声を掛け、その場にあった白ゆりを手に取り跪ずいてこう言いました。

「この花を受け取ってくれませんか？」

すると彼女は石を拾い、僕の眉間に投げました。

ピシッ！

「……………！……………っ……………！……………」

痛いですが、凄く。悶絶してたら彼女は行ってしまいました。慌て追いつけようとしたら

「あんだ！金を払わないとは・・・いい度胸だね！」

「ご、ごめんなさい！」とポケットから適当な額を出し、駆け出しました。はい、眉間はさすってます。

彼女を追っていましたが、複雑な路地で迷子になってしまいました。

家に帰った時は夜です。白ゆりもしなしになっちゃいました。魔法で体を清めて、適当に食事しました。ベッドに入りましたがなかなか寝られませんでした。

正しい撃退方法（前書き）

リアン視点

正しい撃退方法

何なんだアイツは！

宿の部屋で、リアンは同じルートと同じ動きでウロウロと徘徊していた。

初対面で名を名乗らずいきなり求婚してくるなど……あれか！アイツは俗称で「女たらし」とかいうヤツなのか！

「ええい！気晴らしに外に出るか……」

まだ陽が上りきっていない中、リアンは宿の庭にある花壇の前に佇んでいた。

何故だ！ちつとも気が晴れんぞ！寒いし眠いし……アイツが頭から離れんぞ！

「やあ、おはよう」

「!?!」

気が付いたら横に『アイツ』がいた。

「お〜ま〜え〜！」

自分でも恥ずかしい程に声が枯れていた。言った事は取り消せないが・・・無かった事にするぞ。

「えーと、僕はギルバートです。貴女は？」

空気を読め。私が帰れオーラ出しているのがわからんのか

「わ、私はお前とじゃれあつつもりはないぞ・・・興味の無い者に、名は名乗らん」

「・・・・・・・・・・」

何故黙る！私がお前とじゃれあつてはならないじゃないか！

「あー、言ったら帰るか？」

「・・・はい」

まで、最後凄く悲しいぞ。声が下げ調子・・・私が酷いヤツみたいじゃないか・・・と、とりあえず帰って貰うぞ！

「・・・リ・・・アン・・・よし！帰れ！」

待て自分！何故名前を言うだけでこんなに疲れた！

「リアン・・・貴女にぴったりのいいお名前ですね！」

「わかったから帰れ！」

翌日からギルなんとかが毎日アタックしてき始めた。

『撃退方法 その1』

石投げる(二回目)

「愛しの白き君、リアン・・・我が手を・・・」

ビシッ!

「・・・っつ・・・あ・・・」

『撃退方法その2』

逃げる

「リアン、おは・・・あれ？」

『撃退方法その3』

無視

「リアン、よかったら今日僕の家来ない？」

「・・・・・・・・」
「？・・・リアン？・・・オーイ」

『撃退方法その4』
とにかく帰れ・来るなオーラを放つ

「リアン！一緒に花でも見に行かないかい？」
（帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな）

「あれ？花・・・嫌い？」
（帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな）

『撃退方法その5』
殺気を放ちながら睨む

「ねえリアン」

ジロリ

「やだなー、そんなに見つめないでよ」

【結果】

ギルバートは空気読めない& a m p · 諦め悪い

石と思考

くそっ！全部失敗した……次の手が思い浮かばん！……
……というより……

「私は何故あんなヤツを気にしてるんだ？」

疑問が外部に放出される。

「だいたい、いつもならすぐ邪魔者は消すのに……私はどうした！」

朝っぱらから一人、庭の花壇に叫ぶリアンは他者から見れば異様だ。

「ていうか、アイツもアイツだ！キングエルフなら【魅了】^{チャーム}を使えば良いものを……正々堂々落として来るとは……こつも清いと腹立たしいぞ！」

……
……？

「いつもならこの時間に来るのに……」

『諦めた』と、結論付けければ良かったが……リアンにはできなかつた。

「諦めた……のか？……呆れたぞ！その様に薄い恋心に……まったく！男なら最後までやり……通……せ……？」

だから何故私は気にしている！しかも思考が矛盾だらけになっ
てぞ！

「おはよう。リアン」

「っ！」

来たか元凶！また私の思考がおかしくなる・・・

「花を選んでたんだ。」

選んでいい！ああ、コイツといるといちいち反応したくなる・・・

「はい、どうぞ。」

ギルバートは跪き、リアンに白ゆりの花束を向ける。同じ様に純粋
な笑みもだ。

「白ゆりが気に入ってもらえなかったみたいだから・・・リアラに
したよ。」

『リアラ』別の名は【絆の花】又、【愛の花】と言われている形は
白ゆりに似ており色は純白。

コイツ！懲りて無い！

リアンが睨んでいるのに気付かず、ギルバートは相変わらずリアラ
の花束と笑顔を渡してくる。

な、何なんだ・・・コイツ・・・花の問題じゃなくてお
前自身に問題が・・・

とりあえず石を取り、眉間へ投げる

ビシッ！（三回目）

「うっ！・・・」

ええええええええええええええええ！これ三回目だぞ！いい加減学習して避けるよ！

ああ・・・なんか・・・

「・・・う・・・クク・・・」

「え？リアン？」

・・・？・・・私・・・今・・・

頬の筋肉が緩んでいる事がわかった。

そう、リアンは何十年振りに笑っていた

「っ！・・・お、お前が笑わせ・・・」

なんで笑ってるんだ！私は！ギルバートが三回も石に当たったから？避けなかったから？・・・基本一緒だ！

ギルバートはフリーズしている中、リアンの頭に幾つもの考えとツッコミが飛び交う。

その間にクスクス笑っていた事にリアンは気付いていない

「・・・酷い・・・」

フリーズから解けたギルバートが声を上げる。その声があまりに情けなかった為、再びリアンの頬を緩める。が・・・

「あ・・・いや、スマン・・・なんか、こつも容易く受けるとは・・・お前はキングエルフだろ・・・避けるか弾くかすると思つたのに・・・三回も受けるなど・・・」

頬に力入れ緩みを治して弁解した。正直言つと自分に向けて弁解していた。

「・・・」

ギルバートは黙つたままだ。呆れられたかもしれない。

きつと心眼を使って心を覗いたんだ。自分に言い訳しているのに気付いたんだ。・・・あれ？何で言い訳してるんだ？

石と笑み（前書き）

ギルバート視点

石と笑み

ビシッ！（三回目）

「うっ！・・・」

眉間に走った痛み、またまた石を投げられました。しかも威力が増してると来た。物凄く痛い・・・

「・・・う・・・クク・・・」

「え？リアン？」

え？リアン？・・・なにになになに？どうしたの？・・・

「っ！・・・お、お前が笑わせ・・・」

わらわせ・・・？・・・え？何？笑ってるの？・・・

彼女の見えるぎこちない笑み、きつと・・・

「キミはリアン・・・ずっと・・・笑ってなかったんだね・・・」

とても小さな声・・・もしかすると声を発していなかったのかもし
れない

クスクス笑う彼女の目は優しい赤色だった。前までの血色とはかけ
離れている。とてもとても柔らかく、優しく・・・壊れやすい宝石ルビ・
・・・

この『赤』をずっと見ていたい・・・ギルバートは彼女の『赤』を『血』に変えないと誓った。

「・・・フ・・・フフ」

押し殺した笑み・・・

「・・・酷い・・・」

せつかく・・・また笑えたのに・・・堪えないでいいんだよ・・・
・・・わかってて堪えているのなら・・・

正直、泣きそうだった。だから声が情けなかった・・・ほら、彼女が笑いかけてる・・・情けない・・・

「あ・・・いや、スマン・・・なんか、こつも容易く受けるとは・・・お前はキングエルフだろ・・・避けるか弾くかすると思っただのに・・・三回も受けるなど・・・」

・・・！・・・勘違いさせちゃった・・・かな・・・？

「・・・」

どうしよう・・・声に出せない・・・

『・・・笑ってもいいんだよ・・・』

これだけが言いたいのに・・・

・・・ゴメン・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0099z/>

鬼戦記～黒と白～

2011年12月26日23時49分発行